54

『医学天正記』に記された人物たちの治験録とその時代背景

葉山美知子
鎌倉早見美容芸術専門学校

『医学天正記』の著者・曲直瀬玄朔（二代目道三，1549–1631）は16世紀後半の戦国時代を駆け抜けた医師である．この『医学天正記』（以下「天正記」と略す）は患者のカルテ記録集ともいえる治験録である．「天正記」には10種類を越える異本があり，題名も「配剤記」「処剤座右」「医安集」「治験記」「配剤録」など様々である．ここでは『医学天正記』（寛永4年版京大富士川蔵本）に拠って論を進める．

まず「天正記」の目録には1中風，2傷寒 に始まり，59痘診，60麻疹までの60の病部門がある．症例は350例にのぼり，中には右肩に施療日の日付が記載されているものもある．患者は多岐にわたり，天皇・院・親王を筆頭に公家・武家・僧侶・商人・芸術家・庶民が列なる．この治験録に記載されている症例の年代は以下の歴史的事象とほぼ呼応している．即ち，秀吉の全国制覇に向けた　1. 九州薩摩征伐（1587）　2. 小田原北条氏征伐（1590）　3. 秀吉の関白・太閤と秀次の関白任官（1585，1591）　4. 秀吉側室淀殿の鶴松誕生と夭折（1589，1591）　5. 朝鮮征伐 文禄・慶長の役（1592，1597）と秀頼誕生（1593）　6. 秀次高野山での自害（1595）　7. 秀吉の死（1598）　8. 関ヶ原の戦い（1600）と家康の国家覇権　9. 家康の征夷大将軍と秀頼の内大臣任官（1603）　10. 秀忠の征夷大将軍と秀頼の右大臣任官（1605）　11. 大阪冬の陣，夏の陣（1614，1615）と豊臣家滅亡（1615）等である．

具体例を数例あげると，4. 秀次は秀頼誕生によって関白の座と秀吉の養嗣子の座に危機を感じたのであろう，「天正記」の「喘急」部門には1593年初秋「伊豆之熱海ニ御湯治……胸塞痰喘息荒不能臥」と記載される．秀吉の要請で朝鮮に渡り毛利輝元の治療に臨んだ後，帰国した玄朔は秀次の侍医であったため，都によらず熱海温泉に急行した．6. 秀次の運は暗転，謀反の罪で高野山で自害，秀次グループは壊滅，侍医の玄朔も常陸佐竹家に配流された．その折り，玄朔自身が「肺癰」（肺炎）を患う．「天正記」の「肺癰」部門に1594年正月「玄朔48才被遷東海之辺牢居旧冬旅」して急性肺炎の如きで10日ほど寝込んだと記している．常陸での配流生活は秀吉の病死まで2年近くに及んだ．秀吉亡き後は関ヶ原の戦いで家康が覇権を握る．淀殿は9. の時点で豊臣家の復権が絶望的であることを知る．「天正記」の「鬱症」部門に11月1日「内大臣秀頼公御母鬱胸中痞塞而全不能食于時頭痛」の症状を訴えている．その1年余り後の1605年には秀忠は2代目征夷大将軍になる．玄朔は家康と秀忠の侍医団の一員となって都と江戸の双方で診療することになり，1608年には後陽成天皇から贈正二位法印を勅叙される栄誉にあずかる．

【まとめ】 家康が覇権掌握に至るまで，信長・秀吉と彼らを取りまく戦国大名は，権力闘争と興亡に明け暮れた半世紀であった．また国内にとどまらず，西洋の大航海時代を受けて南蛮渡来文化・交易，キリシタンの来日布教など未曾有の歴史展開となった．その時代に生まれあわせた曲直瀬玄朔は，歴史に翻弄されず時の権力者に流されず，さりながらその要請に従い，己の医療の術を惜しみなく患者に施した一生であった．挫折や栄光に惑わされず，施療に励み治験録を書き継いだのである．その記録は，玄朔の医療行為を通して患者が身をもって体験した時代の証言集である．

『医学天正記』は，医師が記した治験録という視点から，400年前に生きた人物たちの歴史的諸相を我々に語りかけているのである．